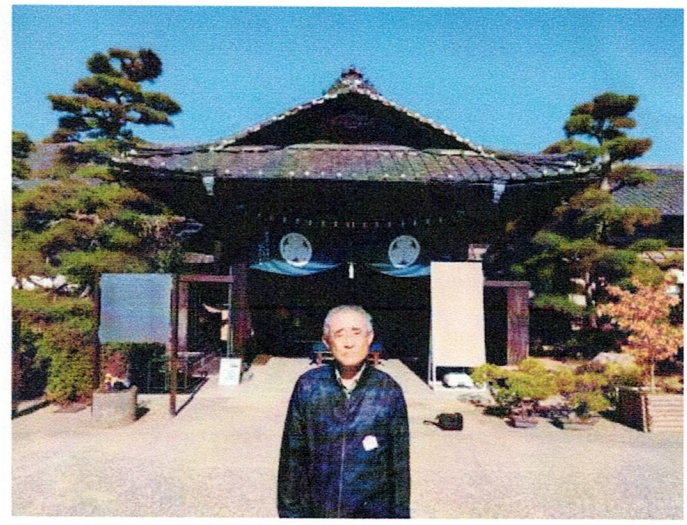
令和５年11月22日（水）～25日（金）クラブツーリズム「四国九城巡りツアー」に参加

22日　名古屋駅ひかり533号7時26分発乗車　岡山駅9時13分着　両備バスに乗車

①高松城跡12時20分から13時20分　ガイド付き説明



高松城跡と場内にある披雲閣前

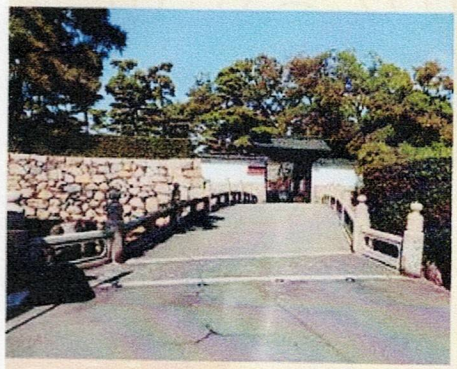
史跡高松城跡（玉藻公園）の沿革

高松城は、またの名を玉藻城と呼ばれていますが、その由来は万葉集で柿本人麿が讃岐の国の枕言葉に「玉藻よし」と詠んだことに因んで、このあたりの海が玉藻の浦と呼ばれていたことによるといわれています。

この城は、天正15年（1587年）に、豊臣秀吉から讃岐一国を与えられた生駒親正が、天正16年から香東郡野原庄（篦原）と呼ばれていた現在地を高松と改め築城に着手した平城（水城）です。縄張り（設計）は、当時築城の名手であった黒田孝高（如水）とも細川忠興ともいわれています。瀬戸内の海水を外堀、中堀、内堀に引き込んだこの城は、日本の三大水城のひとつといわれています。城には、本丸を中心に時計廻りの方向に二の丸、三の丸、桜の馬場、西の丸が配され、三重の堀とともに堅固な構えとなっていました。

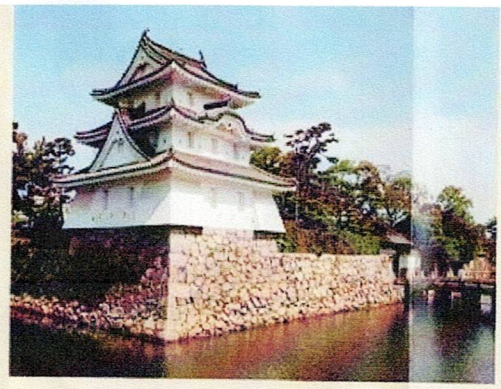
生駒氏の治世は4代54年間続きましたが、寛永17年（1640年）に生駒騒動といわれる御家騒動により、讃岐一国を召し上げられ、出羽国（秋田県）矢島1万石に移されました。このあと、寛永19年（1642年）に当時常陸国（茨城県）下館藩主だった松平頼重が東讃岐12万石の領主として入城しました。頼重は徳川家康の孫で、徳川光圀（水戸黄門）の兄にあたります。将軍家と近親の関係にあった頼重は中国・四国の監察役を命じられていたといわれています。頼重以降、松平氏の治世は11代228年間にわたり、高松は松平氏の城下町として栄えました。

園内のみどころ



① 旭橋と旭門（大手）、桝形石垣

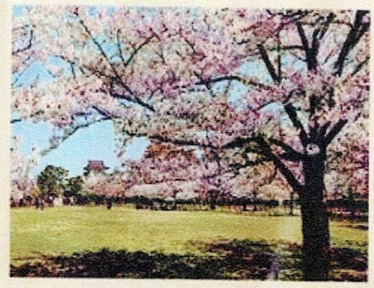
生駒家時代は桜の馬場の南に大手門がありました。旭門は寛文11年（1671年）頃、松平家が行った城の改修により設けられた新しい大手門です。門に対し斜めに架かる旭橋は敵に横方向から攻撃できる構造となっていて、敵の進入を防ぎます。擬宝珠の親柱には松平家12代御当主の頼壽伯爵の「旭橋」と昭子夫人による「あさひはし」の文字がみられます。旭門を入ったところにある桝形石垣は、攻め込んだ敵を包囲するためのもので大きな切石の乱積みが見るものを圧倒します。桝形の北側には埋門があり、南側には太鼓御門がありました。



② 艮櫓（旧太鼓櫓跡）

［昭和25年8月29日 重要文化財指定］

艮櫓はもともと東の丸の北東の隅（現在の県民ホール敷地内）にあった櫓で、北東の方角を丑寅ということからこの名前があります。完成は延宝5年（1677年）といわれ、月見櫓と同時期につくられました。三重三階・入母屋造・本瓦葺で、形は月見櫓と似ていますが、初重に大きな千鳥破風があるのが特徴です。昭和40年に当時の所有者であった旧国鉄より高松市が譲り受けて、2年の歳月をかけて、東の丸より旧太鼓櫓跡に移築されました。

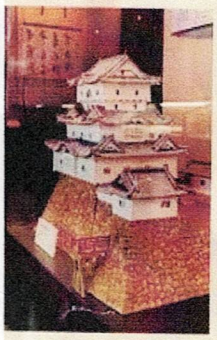


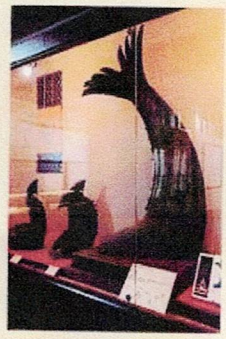
③ 桜の馬場

生駒家時代には南端に大手門があり、広場には藩政を行う対面所等がありましたが、松平家時代の改修によりこれらの施設はなくなり馬場になったようです。現在は桜が植えられ、お花見の場として市民に親しまれています。

④ 桜御門

三の丸入口の櫓門で昭和20年（1945年）の米軍による高松空襲で焼失しましたが、令和4年（2022年）7月、77年ぶりに復元され蘇りました。復元には、古写真と礎石に残る柱跡等が有力な手掛かりになりました。門に付けられた幔幕は白麻地に紺色の桜紋他3種類あり行事により付け替えます。





⑤ 陳列館

築城から現代までの年表、高松城や歴代藩主などに関する文化財や資料、古写真等を展示しています。国宝詩懐紙藤原佐理書（複製）、高松城天守模型、高松城天守鯱（複製）高さ約2m、高松城下図屏風を参考に作成した高松城・城下町模型、取壊し前の高松城天守を含む明治15年撮影の高松城周辺の写真（平成17年、英国ケンブリッジ大学図書館で発見）、彦根城・高松城姉妹縁組式典（昭和41年）、水戸市・高松市親善都市提携調印式（昭和49年）の様子もあります。

⑥ 披雲閣

［平成24年7月9日 重要文化財指定］

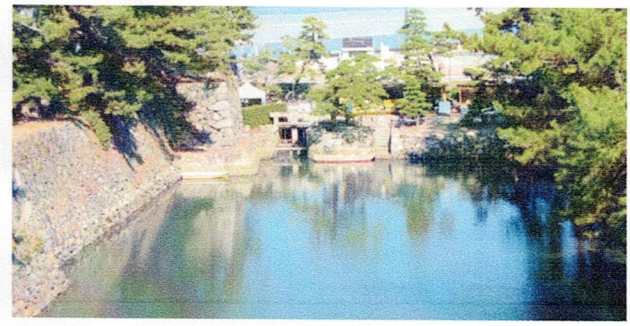
延床面積は1,887㎡。

松平藩時代にも現在の場所に披雲閣と呼ばれる広大な建物（現在の約2倍）がありました。藩の政庁及び藩主の住居として使われていましたが、明治時代老朽化により取り壊され、その後、3年の歳月と当時のお金で15万余円の巨費を投じて、大正6年（1917年）現在の披雲閣が完成しました。披雲閣には142畳敷の大書院をはじめ、槇の間、松の間、蘇鉄の間など雅致を生かした部屋があり、波の間には、昭和天皇・皇后両陛下が宿泊されました。第2次世界大戦後しばらく占領軍に接収されていましたが、高松市が譲り受けてからは、貸会場として会議、茶会、華展などに利用され、市民に親しまれています。

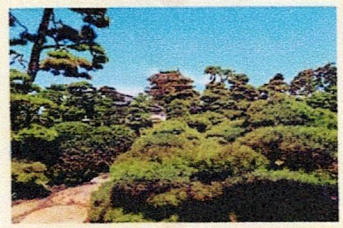
官休庵（武者小路千家）と松平家

高松松平藩と茶道三千家のひとつ武者小路千家は、始祖千宗守が高松藩祖松平頼重に茶頭として仕えて以来、茶の湯を通じて今日も強く結ばれています。松平家が所有する楽焼茶碗「木守」は、千利休が作らせたもので、歴代の武者小路千家当主が「宗守」を襲名する披露茶会には必ず使用され、そのときには武者小路千家から松平家に、拝借の使者が立てられます。

松平家時代の 1670 年に改築された天守は３重５階（３層４階＋地下１階）唐作り。
今は天守台だけ



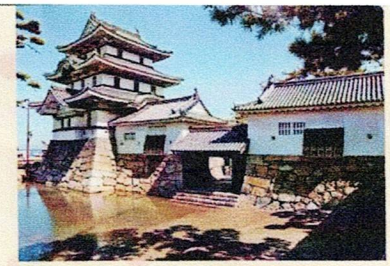
海への舟付け場所



7 披雲閣庭園

［平成25年10月17日 名勝指定］

この庭は披雲閣の建築にあわせて、大正6年（1917年）頃築造された枯山水の庭で、江戸時代の庭園の一部が残ります。巨大な石灯籠や重さ11tの手水鉢等が見どころで、昭和天皇・皇后両陛下の御手植松もあります。



8 月見櫓・水手御門・渡櫓

［昭和25年8月29日 重要文化財指定］

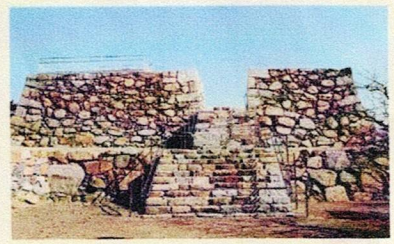
月見櫓は北の丸の隅櫓として延宝4年（1676年）頃に完成したといわれ、出入りする船を監視する役割を持つとともに、藩主が江戸から船で帰られるのをこの櫓から望み見たので［着見櫓］ともいわれています。総塗籠造りの三重三階・入母屋造・本瓦葺で、初重は千鳥破風、二重は唐破風と屋根の形を対象させています。月見櫓に連なる薬医門様式の水手御門は、いわば海の大手門です。

9 水門

この城は堀が海とつながっているので、潮の干満による水位調整のため水門が設けられています。堀にはタイやヒラメなど海の魚がいて、鯛のエサやり体験「鯛瀬城就」や和船「玉藻丸」の内堀遊覧「城舟体験」（3月～11月）を楽しむことができます。また、6月の第一日曜日には水任流保存会による「英公様追悼游泳祭」が開催されます。

10 鞘橋

本丸と二の丸を結んでいる唯一の連絡橋で、当初は櫓干橋でしたが、江戸時代中期末頃にはこのような屋根付の橋になっていたようです。



11 天守台

生駒家時代の天守は絵図や古文書によると3重だったとされています。松平家時代の寛文10年（1670年）に改築された天守は3重5階（3重4階＋地下1階）唐造り（南蛮造り）で四国最大の規模を誇っていました。天守は明治17年（1884年）老朽化を理由に取り壊されましたが、平成17年には英国ケンブリッジ大学図書館で天守の鮮明な写真（明治15年撮影）が発見され、平成17年から平成25年にかけて行われた天守台修復工事で地下1階部分から58個の礎石が当時のまま現われるなど天守の再現に期待がかかっています。

内堀が海へ

讃岐うどん昼食 13 時 50 分～14 時 10 分

②徳島城跡（青石垣を持つ蜂須賀氏の居城）15 時から 16 時　ガイド付き説明

徳島城

戦国時代になると、阿波の地は群雄が割拠し、しばしば城主が入れ替わった。1582 年（天正 10 年）には土佐国の長宗我部元親が侵攻し阿波が平定された。

1585 年（天正 13 年）、豊臣秀吉の四国征伐に勲功のあった蜂須賀家政（蜂須賀正勝の子）が阿波 1 国 18 万 6000 石を賜った。入封当初は徳島市西部にあった一宮城に入城したが、入封早々に現在の地に大規模な平山城を築造し、1 年半後の 1586 年（天正 14 年）完成した。以後、大坂の陣の戦功等により淡路 7 万 1 千石の加増がされ、江戸時代を通して徳島藩蜂須賀氏 25 万 7 千石の居城となり、明治維新を迎える。

天守　東二の丸の天守跡

創建当時の天守は元和年間（1615 年-1624 年）に取り壊されたといわれており、まもなく、城山の中腹にある東二の丸に天守代用の御三階櫓が構えられた。

東二の丸天守は、天守破却後に天守の代用として建てられた、当時は御三階櫓と呼ばれていたものである。なぜ、二の丸に建てられたのかは定かではなく、景観バランスを整えるためであるとか城の防備上の都合によるものなどが考えられている。

3 重 3 階建てで、櫓台はなく初重平面形は正方形である。下から 7 間四方・5 間四方 3 間四方といった具合の層塔型の特徴である一定の逓減率があるが、外観は望楼型といういわゆる復古型などと呼ばれるものである。外観意匠は、全面下見板張で破風は 3 重目の入母屋破風のほかに 1 重目の向唐破風と大入母屋破風が付けられていた。

写真は天守跡前で　＜ガイドの手＞

リバーサイドホテル松栄 17 時着

23 日　ホテル 8 時 20 出発

③高知城 9 時から 10 時（現存天守閣）

南海の名城・高知城

高知城は、日本で唯一本丸の建築群がすべて現存する、江戸時代の姿を今に伝える城郭である。

もともとこの場所には南北朝時代に築かれた大高坂城があり、戦国時代には長宗我部元親が岡豊城より移り築城に取り組んでいた。しかし、治水に難儀し、わずか3年で元親は浦戸城へ本拠を移した。その後、関ヶ原の戦の功績で遠州掛川より入国した山内一豊がこの地を城地と定め、慶長6年（1601年）秋から築城をはじめた。

一豊は築城家として知られた百々越前守安行を総奉行に任じ、近隣諸村から石材や木材を取り寄せ工事を進めたが、難工事の末城のほぼ全容が完成したのは10年後、二代藩主忠義の治世に移った慶長16年のことであった。享保12年（1727年）には一部の建物を残し焼失。ただちに復旧にあたったものの財政難もあって天守閣が復興するまでに20年以上の歳月を要している。その後、明治維新により廃城となり本丸と追手門を除くすべての建物が取り壊され、公園となっていまに至っている。別名を鷹城。

高知城みどころ案内

石樋

雨の多い土佐のこと、高知城において「雨仕舞い」は敵からの防御と並び重要であった。城内には多くの水路が設けられ、石垣から飛び出した石樋で排水していた。城内で16箇所が確認され、本丸の石樋はいまも現役である。三ノ丸で発掘された水路と石樋は構造をいつでも見ることができるようになっている。

石垣

高知城の石垣は、近江の技術者集団・穴太衆（あのうしゅう）によるもの。雨の多い土地柄を考慮し、崩れにくく排水能力も高い野面積が多く採用されている。見かけは雑にみえるが、非常に頑丈な築き方である。なお、城内では杉ノ段にある石垣と鉄門にある打込ハギの石垣が特に美しく、必見。

三ノ丸では、長宗我部元親がこの地で築城した際の石垣が発掘され、見ることができる。

防御

軍事拠点としての城の性格を伝える貴重な遺構が高知城には数多く残っている。

城内の各地でカギ状に曲がる石垣は「横矢掛り」といい、死角をなくしてどこからでも弓矢を敵に浴びせられるようにするための仕掛け。

塀に開いた丸、三角、四角と様々な形を持つ「矢狭間」は、ここから弓矢で敵を駆逐するためのもの。

最後の砦である天守には「石落とし」と「忍び返し」の鉄剣が設けられており、これを突破して天守に取り付くのは至難の技だ。

堀

高知城をめぐる堀のうち、現在残されている堀は約1/3足らず。また、堀の幅も現在では半分近くになっているほか、城のそばにあった土塁も撤去されているなど江戸時代とは大きく様子が変わっている。昔は城の北側を流れる江ノ口川から水を引き入れていた。

高知平野のほぼ中心に位置する大高坂山（標高 45m）上に築かれた梯郭式平山城で、山の南を流れる鏡川、北の江ノ口川をそれぞれ外堀として利用されていた。

戦国時代以前には大高坂山城または大高坂城と呼ばれる城が築かれていた。最初の築造時期は南北朝時代。土佐の戦国大名として台頭した長宗我部元親は 1588 年（天正 16 年）、岡豊城（おこうじょう）からここへ本拠地を移そうとしたが低湿地の山麓は工事が難航し、代わりに港（浦戸湾）に臨む浦戸城を選んだ。

長宗我部氏は関ヶ原の戦いで敗れた西軍に与して改易され、代わりに翌 1601 年（慶長 6 年）、山内一豊が土佐国を与えられて土佐藩を立てた。一豊は大高坂山で築城に取り掛かり、1603 年（慶長 8 年）に本丸や二の丸は完成したが、城全体の完工は 1611 年（慶長 16 年）、一豊の没後で二代目藩主の忠義の代になっていた。3 層 6 階の天守は、一豊が加増・転封前に居城としていた掛川城（静岡県）を模したといわれる。一豊により河中山城（こうちやまじょう）と名付けられたが、高智山城と名を変えたのち、現在の城名となった。

江戸時代初期の建物は 1727 年（享保 12 年）の大火でほとんどが焼失し、1753 年（宝暦 3 年）まで四半世紀かけて再建され、現存天守は 1749 年（寛延 2 年）造と推測されている。

高知城は本丸の建造物が完全に残る唯一の城として知られていて、又天守と本丸御殿が両方現存する唯一の城である。明治 6 年（1873 年）に発布された廃城令や、太平洋戦争による戦災を免れて天守、本丸御殿、追手門など 15 棟の建造物が現存し、全て国の重要文化財に指定されている。

宇和島真珠館にて昼食
13 時から 13 時 50 分

④宇和島城（現存天守閣）南海の伊達家に居城

14 時 30 分から 15 時 15 分　ガイド付き説明

慶長 20 年（1615）に伊達政宗の長男、秀宗が入城後、明治を迎えるまで”西国の伊達”９代の居城でした。重要文化財に指定されている華麗さと格式を併せ持つ天守は、宇和島伊達家 2 代藩主の宗利が寛文 6 年（1666）頃に天守のほかに、櫓門などを全面的に改修、3 重 3 階総塗籠式、層塔型のものです。かつて同所には、築城の名手として有名な藤堂高虎が慶長 6 年（1601）に構築した堀や石垣などの縄張りは高虎のものをほぼ引き継いで、水城の性格を併せ持った平山城となっている。2 辺が海に面し、3 辺が海水を引き入れた堀になっている五角形の縄張りである。

⑤大洲城（日本一の高さを誇る四層の復元天守）16 時 15 分から 17 時

この地に初めて築城したのは、鎌倉時代末期に守護として国入りした伊予宇都宮氏の宇都宮豊房で、元徳 3 年／元弘元年（1331 年）のことであると伝わる。

豊房には子がなく筑後宇都宮氏の宇都宮貞泰の子の宇都宮宗泰を養子に迎えた。伊予宇都宮氏はその後、国人として二百数十年間にわたって南伊予を中心に支配を行うが、永禄の末期に毛利氏の伊予出兵によって降伏した。天正初年に土佐の長宗我部元親と通じた家臣の大野直之によって大洲城を追われた。しかし天正 13 年（1585 年）にはその大野直之も豊臣秀吉の意を受けた小早川隆景によって攻め滅ぼされ、その小早川隆景が 35 万石で伊予に入封し、大洲城は一支城となった。

その後は戸田勝隆が城主として入ったが、文禄 4 年（1595 年）に藤堂高虎が入城すると近世の

城郭として整備された。江戸時代初期の慶長 14 年（1609 年）には淡路の洲本から脇坂安治が転封され、この 2 人の時代に天守[3]をはじめとする建造物が造営された。

また脇坂安治の時代に従来の「大津」から現在の「大洲」に城名が変更（異説あり）された。元和 3 年（1617 年）に伯耆米子から 6 万石で加藤貞泰が入り、以後は加藤氏が 12 代に亘り大洲藩主として治める。天守の高さは石垣の上から約 20mあり、本丸の南東隅に建てられ、北に高欄櫓、西に台所櫓を配置し渡り櫓で連結した複合連結式層塔型 4 重 4 階である。中央付近に心柱が通され、それに伴い 2 階の床には吹き抜けが造られていた。外観は、下見板張りで、比翼千鳥破風、千鳥破風、向唐破風で屋根を飾り、窓には連子窓が多用されたが、2 階には華頭窓のみが並べられていた。

注：当日は、1 泊二人で百万円程の貸し切り宿泊客があり、そのおもてなし隊の準備の様子

参考に、美濃の国岩手いた竹中家 6 代重長の弟重定はこの大洲加藤家に養子に行く。7 代目重栄（しげよし）は大洲の加藤家重貞の子で竹中家重長の養子となる。

松山東急 REI ホテル 18 時 30 分着

24 日　ホテル 7 時 50 分出発

⑥湯築城跡（国指定史跡） 8 時から 8 時 40 分ガイド付き説明

松山市道後公園の中ある湯築城は中世の城郭が持つ石垣や天守が無く、地形を利用して作られた平山城で堀や土塁が現存する。

◆湯築城と河野氏の歴史

250年以上にわたる、河野氏の栄華。

湯築城は、中世の伊予国の守護であった河野氏が南北朝期から戦国期（14世紀前半～16世紀末）まで、約250年間にわたって居城としていました。河野氏は、風早郡河野郷（松山市北条地区）を本拠として勢力を伸ばした一族で、源平合戦（1180～1185年）では河野通信が源氏方として功績を挙げ、鎌倉幕府の有力御家人となり伊予国の統率権を得ました。

承久の乱（1221年）で没落するものの、通信のひ孫通有が元寇（1281年）で活躍し、一族の力が復活した南北朝期の通盛の時（1335年前後）に河野郷からこの湯築城へ本拠を移しました。その後、有力守護細川氏の介入や一族間の内紛がありましたが、足利将軍家と結びつき近隣の大内・大友・毛利氏などと同盟や縁戚関係を持ちつつ、伊予の守護としての地位を確立しました。庶子家との争いも克服し、通直（弾正少弼）は、湯築城の外堀を築き（1535年頃）娘婿の村上海賊衆（来島通康）との関係を強化しましたが、後に離反し、一族の力は徐々に衰えていきました。最後の当主通直（牛福丸）は、全国統一を目指す豊臣秀吉の四国攻めにより小早川隆景に湯築城を明け渡し、平安時代末期から戦国期（12世紀末～16世紀末）までの、実に400年の長きにわたる河野氏の伊予支配に終止符が打たれました。

※鎌倉時代に時宗を興した一遍上人は、河野通信の孫にあたります。

⑦伊予松山城（高石垣が残る名城・現存天守）9時から10時15分

松山城沿革

松山城は、標高132mの勝山山頂に本丸、西山麓に二ノ丸（二之丸史跡庭園）や三之丸（堀之内）を置く連郭式平山城で、本丸の中枢である本壇には連立式天守がそびえる、広大な城構えである。

創立者は、賤ヶ岳の七本槍の一人としても有名な加藤嘉明。慶長５年（1600）関ヶ原の戦いでの成功を認められて20万石となった嘉明は、居城を正木城（愛媛県松前町）から道後平野の中央にある勝山に移し、この地を「松山」と命名した。

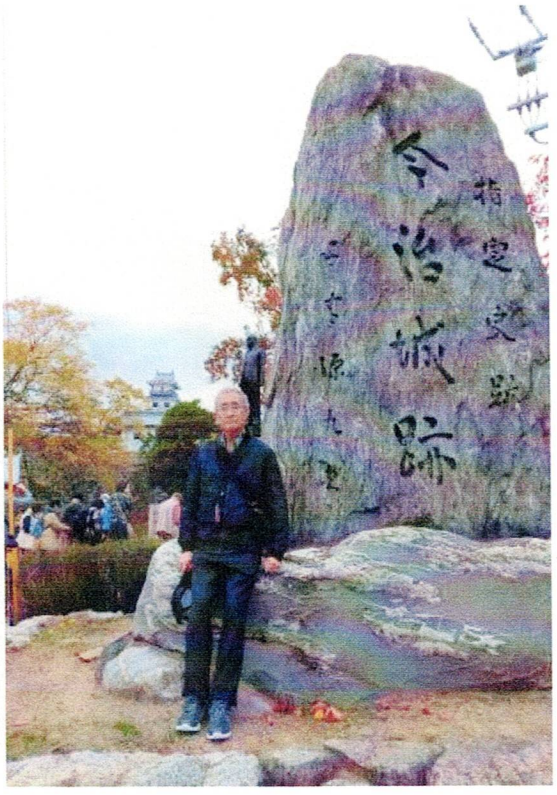
着工から25年、寛永４年（1627）松山城の完成を目前にして嘉明は会津へ転封となる。代わって入封したのは蒲生氏郷の孫・蒲生忠知。二之丸を完成させたが、同11年８月、参勤交代の途中の京都で病没し、嗣子なく断絶した。

寛永12年（1635）７月、伊勢桑名城主・松平定行が伊予松山15万石に封じられた。定行は寛永16年から３年をかけて本壇を改築し三重の連立式天守を築造した。

天明４年（1784）９代定国のとき天守が落雷で焼失。すぐに復興許可は下りたものの、財政難などにより工事は難航し、12代勝善の嘉永５年（1852）にようやく竣工、安政元年（1854）落成式典が盛大に行われた。現在の天守はこのときのもので、幕末に造られたにもかかわらず創建時の桃山文化様式が見事に再現されている。

明治維新後は、公園として整備・活用された。昭和に入って放火や戦災により櫓など一部が焼失したが、昭和41年（1966）から全国にも例を見ない総木造による再建が進められ、現在は重要文化財21棟を含む51棟が建ち並び、往時の姿を取り戻している。

⑧今治城（名手藤堂高虎が築城） 12時10分から13時00分　ガイド付き説明



今治城の地は瀬戸内海に面し、「吹揚の浜」と呼ばれた砂丘地帯でした。

築城の名手として名高い藤堂高虎は、関ヶ原の戦功で伊予（愛媛県）半国20万石を領し、慶長7年（1602）にこの地に築城を開始しました。約6年の歳月をかけて慶長13年頃にほぼ完成したと考えられています。

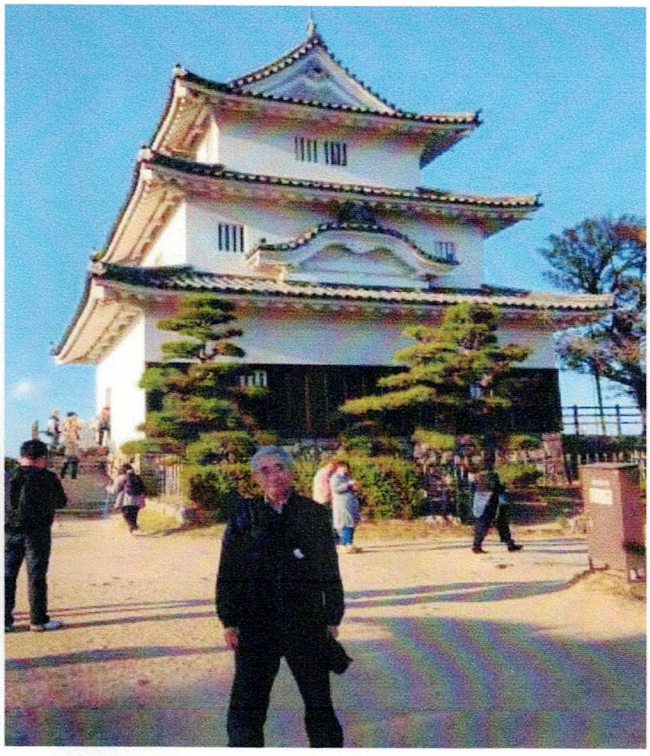
直後に高虎は伊勢・伊賀（三重県）に移り、今治城には養子の高吉が在城します。寛永12年（1635）に徳川将軍家の一門（家門）である久松松平氏が3万石で城主となり、海側の郭の大改修を実施。最終的な今治城の完成を見ました。

明治時代初期に廃城となり、破却が進みましたが、城の中心部の内堀や石垣はほぼ完全に遺っており、昭和28年（1953）に愛媛県史跡に指定されました。現在では天守や櫓・城門などの再建が進み、雄大な城郭の姿を見せています。

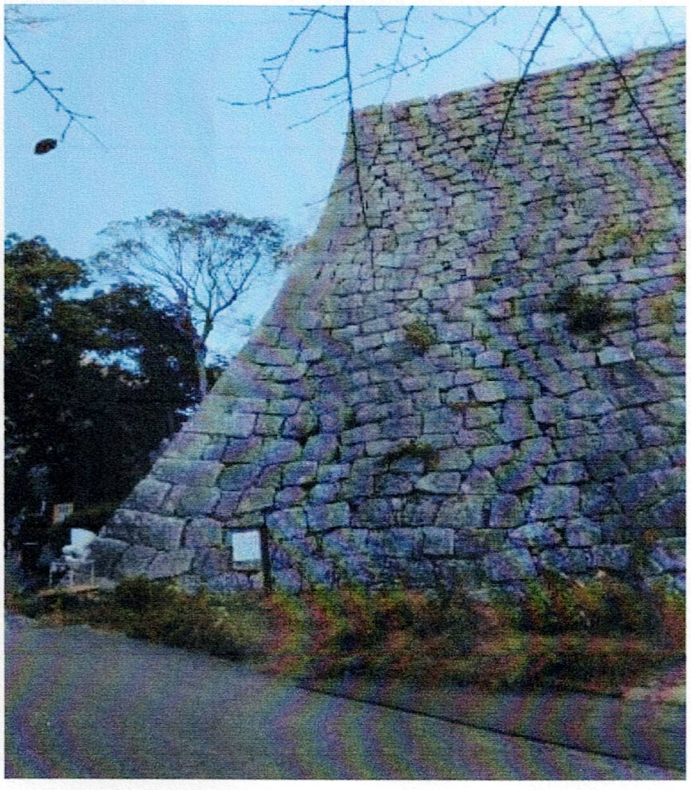
西条リンリンパークにて昼食 13時10分から13時50分

⑨丸亀城（そそりたつ高石の名城・現存天守）15時30分から16時20分

この写真は今治城



丸亀市街地の南部に位置する亀山（標高66メートル）を利用し、縄張りはほぼ四角形で亀山の廻りを堀（内堀）で囲む、渦郭式の平山城である。石垣は、緩やかであるが荒々しい野面積みと端整な算木積みの土台から、頂は垂直になるよう独特の反りを持たせる「扇の勾配」と呼ばれる。山麓から山頂まで4重に重ねられ、合わせると60メートルになり、総高としては日本一高く、三の丸石垣だけで一番高い部分は22メートルある。誤解されやすいが、あくまで総高としての日本一である。



頂部の本丸には江戸時代に建てられた3層3階櫓が現存する。この建物は唐破風や千鳥破風を施して漆喰が塗られ高さは15メートルあり、現存天守の中で最も小規模である。天守の形成した時代に関する研究としては、元和元年の武家諸法度以降、天守は新造されることがなかったとして丸亀城を三重櫓とする説や、京極氏が入封後に幕府に許可を得て櫓を建てたという説、すでに明暦の丸亀城郭を記した讃岐国丸亀城（大洲絵図）を根拠に、京極入封以前の山崎時代に櫓や石垣がほぼ整っていたとする研究がある。

注：三大海城はと呼ばれているのは、高松城、今治城、宇和島城の三城です。

最後に、活字の画像は入城に際にもらったパンフレットから借用しました。

岡山駅着17時50分　岡山駅発ひかり522号18時36分　名古屋駅着20時38分

今までの人生で一番印象的で思い出になる四国九城巡りツアーでした。

追記　藤堂高虎に関連する四国の３城　注：写真は今治城内の藤堂高虎の像

藤堂高虎が出世した理由は、城郭建築の腕前です。「加藤清正」と並ぶ「戦国二大築城名人」とされて、「黒田如水」を加えて「戦国三大築城名人」と言われる。築城名人としても知られる藤堂高虎は、多くの城を築城・修築している。生涯で築城に携わった数は20を超えるとも言われる。

藤堂高虎がこれほど多くの築城や建築を任される。それは、藤堂高虎が築城を「戦の要」ととらえ、実戦に強いだけでなく、新しい構造を生み出すことで早く城が完成するようにしたためです。

（１）大洲城（おおずじょう）：愛媛県大洲市

伊予国守護のために、1331年（元弘元年）、鎌倉時代の終わりに創建された。200年以上宇都宮氏が居城していたが、戦国時代末期に「大野直昌」（なおしげ）へ、さらに豊臣秀吉の四国平定によって「小早川隆景」へと城主が変わっていく。

藤堂高虎が「大洲城」の城主となったのは、1595年（文禄４年）のこと。小早川隆景が九州に封ぜられたのちに城主となっていた「戸田勝隆」の朝鮮出兵中の病死がきっかけでした。藤堂高虎は大洲城を得ると、改修を行ない自身の居城とする。大洲城周辺には川があったことから、藤堂高虎は天然の堀にして、地形をうまく使った大改修を実施するなど、中世からの城郭を近世城郭へと生まれ変わらせた。その後藤堂高虎は、関ヶ原の戦いで新たに得た恩賞により、改修した大洲城を養子の「藤堂高吉」（たかよし）へ譲ります。のちに、城主は藤堂家から脇坂安治へ引継ぐことになった。現代に入り幾度もの復元工事などを経て、江戸時代の姿を忠実に再現した天守が復元。解体されていない台所櫓、高欄櫓、苧綿櫓、三の丸南隅櫓は、国の重要文化財に指定されている。

（２）宇和島城：愛媛県宇和島市

もとは鎌倉時代に造られた板島丸串城という城で、1596年（慶長元年）に藤堂高虎の手によって改築が始まった。この城の大きな特徴が、不均等の５角形をした外郭です。

特徴的な外郭は上から見れば５角あることが分かるが、地上から見ると四角形のように見える。隠密が城の形を見破れないという逸話が残るほど、実に巧妙に作られた城でした。

このように一見すると四角形に見える外郭を藤堂高虎が作ったのは、有事の際に血路を開くためだったと言います。他にも海に面した地形を活かすなど藤堂高虎の築城の手腕が発揮され、そのあとも引き継がれていきった。しかし、宇和島城築城もつかの間、藤堂高虎はすぐに今治城築城のために去っていく。のちに宇和島城は、仙台伊達家の分家が代々住む城となりました。

（３）今治城：愛媛県今治市　　藤堂高虎が創始した層塔型の今治城

1602年（慶長７年）に築城。関ヶ原の戦いの戦功により、伊予半国20万石を拝領した藤堂高虎が、瀬戸内海に面した海岸に築いた平城で、豊臣家を慕う西国大名を監視する役割を担っていた。広大な水堀と反りのない直線的な石垣、脆弱な地盤を安定させるための幅広い犬走り（いぬばしり：石垣の下の道）、侵入者の方向感覚を失わせ、能率的な都市経営を目指した升目状の城下町設計など、最新の技術とアイデアを盛り込んで築かれており、藤堂高虎の代表作とも評されている。

築城当時は、海水を引き入れた三重の堀に囲まれ、海から堀へ直接船で出入りできるなど、海上交通の要所であることの利を最大限に活かした構造になっていた。

さらに本丸には、五重塔に似た構造の、日本初とも言われる「層塔型」の五重天守が築かれる。